2026 年度　学校推薦型選抜・特別選抜（社会人・帰国生徒）
〔看護学部〕　小論文（図表理解）
出題の意図と解答の傾向

問題

【出題の意図】

看護専門職は、病気や怪我のために入院する人びとの診療や療養に関わるのみならず、地域で暮らす人々の健康といのちを守るためにその病気や怪我の予防にも意識的に取り組むことが求められる。特に子どもの不慮の事故は、本来亡くなるべきではない年齢の子どもたちの命と未来を奪うものであるが、それは「個人の不注意」ではなく、「社会として防ぐことが可能な健康課題」である。また、不慮の事故による死亡は氷山の一角であり、障害を残す事故や入院・外来受診が必要な事故も多数存在している。そのため、日本小児科学会は、子どもの事故を「予防可能な傷害」と位置づけ、医療現場での対応だけでなく、日常生活での予防の重要性を強調し、保護者のみならず、社会全体で事故予防に積極的に関与すべきであると提言している。受験生の多くは成年を迎えた年齢であり、子どもたちを守る大人の一員となる。特に看護専門職をめざす受験生には、ニュースなどで報道される子どもの不慮の事故に関心をもち、その背景や対応を考えるなど子どもたちの健康と命を守る姿勢をもつことを願って出題した。

本試験では厚生労働省の人口動態調査人口動態統計より、子どもの不慮の事故に関するデータの一部を提示し、提示された図表から状況を把握するとともに、受験生自らの知識と合わせて考察し、予防のための対策についてどのような意見を述べることができるかをみた。

＜設問１＞

【解答のポイント】

設問１は、子どもの死亡数に占める不慮の事故の割合、年齢階級別の子どもの死因、不慮の事故の年齢階級別にみた死亡数と種類別構成割合などから、近年の日本の子どもの不慮の事故の推移と現状について記述する問題である。

図表１では、近年の日本の子どもの死亡数および不慮の事故による死亡数は減少しているものの、出生数の減少に伴い子どもの死亡数に占める不慮の事故の割合は７～8%とほとんど変化していないことを読みとることがポイントである。図表２では、子どもの死因において、不慮の事故は病気を含むすべての死因の中で上位（１～４歳では第２位、０歳・５～９歳・10～14 歳）であることが記述できる。図表３では、子どもの不慮の事故による死因には、発達段階別の特徴があることが分かる。０歳児では「不慮の窒息」による死亡が圧倒的に多く、１～４歳では「不慮の窒息」「交通事故」「溺水・溺死」、５～９歳、10～14 歳では「溺水・溺死」「交通事故」による死亡が多くなることを読みとれる。各図表から読み取った推移と現状について、字数制限のある中で、いかに正確にわかりやすく記述できるかが重要である。

【解答の傾向】

［総合評価］

300 字の字数制限の中で、設問に沿った図表の要素を読み解き、文章化するには工夫が求め

られた。図表１では、データの推移と現状について、記載はしていたものの、示された日本の出生数の変化や少子化についてまったく触れていない解答が目立った。単に各数値を列挙するだけで、解釈や関係性に踏み込めていない解答が多かった。さらに、死亡数の棒グラフと折れ線グラフの数値の混同や、死亡数の増減の計算間違い、データ数値の表記間違い（8.0%を８割と記載等）なども散見された。設問に沿って、グラフから数値を正しく把握して記述する力をつけてほしい。図表２では、多くの受験生が出題意図を踏まえ、子どもの不慮の事故に着目した文章を記載できていた。一方で、その他の先天奇形や悪性新生物、自殺など、主題から逸れたデータに着目して記述した解答もあった。何を問われているのか、どのデータに着目する必要があるのかを理解し、各図表を読むことが重要である。図表３では、死亡者数が占める割合の多い不慮の事故（窒息、溺水・溺死、交通事故）と、発達段階別の不慮の事故の種類の特徴を読み取るものであり、概ね記述できていた。しかし、人数に%を付けて記述するなど、数値や単位の誤記載が散見された。表やグラフの正確な読解は必須であるため、日頃から統計資料やグラフに触れ、分析的に読み取る習慣を身につけることが望まれる。

［文章構成］

図表の順に整理して記述することで、死亡の推移と現状について簡潔にまとめることができる設問であった。多くの受験生が適切な構成で記述できていた。一方で、求められていない内容等を記載したことで、問われている図表の説明が不十分な解答が散見された。設問の意図やテーマを適切に捉え、図表から読み取れた事項を字数制限内で、簡潔明瞭にまとめる力が重要である。

＜設問２＞

【解答のポイント】

設問２では、設問１の内容を踏まえつつ、図表４～６を用いて、子どもの不慮の事故の課題と対策について、受験生自らの考えや意見を論じることを期待した。

図表４からは、交通事故を除く不慮の事故の発生場所について、年齢が小さいほど家庭内での事故が多く、年齢が上がると家庭外での事故が多くなることが読み取れる。よって、幼少児は特に家庭での事故予防、活動が活発になる年齢以降では地域での事故予防も重要となると推測することがポイントである。図表５では、不慮の窒息の原因には年齢による違いがあること、つまり、乳児では安全に過ごせるはずのベッド内での窒息が多い現状や、１歳を超えると（嘔吐による）胃内容物の誤嚥や食物の誤嚥などが生じており、不慮の事故が睡眠や食事などの場面で生じていることが読み取れる。また、図表６では、不慮の溺水・溺水は０～２歳では家庭内の浴槽で多く発生していること、３歳以降になると川・海などの自然の水域内での発生が増加することが読み取れる。よって、子どもの不慮の事故による死亡が、発達に伴って場所や原因が変わり、いずれの事故も、子どもの眠る・食べる・遊ぶといった日常の生活の中に潜んでいることを課題として把握できるかががポイントとなる。

そこで、受験生には図表に示された子どもの不慮の事故への対策として、自身の学びや知識・経験等から課題解決のための柔軟な意見を期待した。まず対策として、安全な環境整備や子育て上の注意点など事故予防のための情報発信・情報共有が挙がるのではないかと考えられる。寝具の硬さや窒息の原因になるものの除去、うつぶせ寝への注意、子どもの咀嚼・嚥下能力に適したサイズ・硬さ・形状の食事内容、事故予防グッズの活用、風呂に溜め水をしないことや風呂場の施錠や柵の設置、レジャー時の安全な浮き具の使用など、具体的な記述が考えられる。情報発信

方法については、集団・個別指導のほか情報通信技術の活用など、若い世代ならではの効果的な工夫を期待した。また、事故予防は日常生活で起こるものであるが、保護者の見守りには限界がある。よって、看護職として、また地域社会として、子ども自身への安全指導や、見守り強化のための地域住民への安全教室、不慮の事故による怪我で受診した子どもの背景や家庭環境に配慮した再発防止に向けた支援などの啓発活動などの対策が考えられる。加えて、子どもの安全に配慮した製品開発や安全な住宅供給など、環境整備のための企業や社会全体での取り組みもある。行政や教育、保育、医療機関など各機関連携による子育て支援、リスク評価や安全など制度的な整備も考えられるかもしれない。本試験は、何を記載すれば正解ということはなく、現状と課題を踏まえて、受験生がこれまでの日常の社会生活の中で触れた学びや知識を活用して、不慮の事故による子どもの死亡や傷害を少しでも減らすための対策を考え記述できるかどうかがポイントである。

【解答の傾向】

［総合評価］

設問２は、設問１および図表４～６から子どもの不慮の事故に関する課題を整理し、対策について論じる力が問われた。多くの受験生は、図表４について、不慮の事故が幼少期は家庭内が多く、成長に伴って家庭外が多くなることを記載できていた。しかし、データの読み取りや記述の間違いが散見された（５～14 歳の学校や施設、公共の場所での死亡事故の割合は約５％だが、半数などと記載）。図表を確実に読み取り、正確に記述する力が求められる。図表５では、０歳児の窒息の原因はベッド内の窒息が多く、成長するにつれて胃内容物の誤えんや食物の誤えんが多くなることを記載していたが、表現やデータの引用については個人差が大きかった。単に数値の変化のみを説明しているものもあれば、子どもの行動特性や危険要因など背景にも気が付いて考察した解答もあった。図表６では、多くの受験生が、不慮の溺水・溺水のうち、０～２歳は多くが（家庭内の）浴槽で発生し、３歳以降では自然の水域内等の外での発生が増えることの両方を記述できていた。しかし、３歳以降の溺水場所の変化の記述がない解答も散見された。また、３歳以上の溺水場所の変化を記載できていても、データの読み取り・記述に間違いがある答案も複数見られており、図表のデータの正確な記述が求められる。なお、解答のポイントに記載した子どもの日常の生活の中に危険が潜んでいることに気が付いた受験生は少数であった。

子どもの不慮の事故の課題と対策では、図表から読み取った現状から受験生が何を課題として捉え、どのような対策を記述できるかを見た。各々が様々な背景や課題を考えて、多様な対策が記述されていた。子どもの発達や生活環境と絡めた家庭内および屋外や地域社会での対策、保護者や子ども自身への教育など広い視点をもったもの、医療者としての役割の検討、子育てに関わる制度改革、人の目の届かない時間・場所での AI カメラの活用、企業による安全な子ども用製品開発など多様な視点からの対応策、実現可能性のあるアイデアなどの記述には加点した。一方で、原因として保護者の責任のみを追及し、「親による監視の強化」を挙げる解答も多かった。子どもの権利への配慮が不十分で一般論にとどまった解答と、共働き家庭の増加など子育て支援を要する現代の社会的背景を踏まえ、具体的な方策まで示した解答とでは、内容の深度に差があった。また、今回の設問では問われていない「自殺」の対策に言及した答案も複数見受けられた。さらに、事故予防することで、少子化の抑制につながるなど論理が飛躍したものもあった。設問の意図やテーマを適切に理解した意見の記述が必要であり、解答時には主題を再度確認してほしい。また、少数だが、時間制限内で記述し終えなかった答案もあった。本学の小論文は制

限時間 60 分であるため、過去問も含めて出題の意図と解答の傾向を確認した上で、時間内に記載できるよう練習しておくことが望ましい。

［文章構成］

設問２では、複数の資料を関連付け、限られた字数の中で論点を整理する構成力が求められた。多くの学生は、図表４～６のデータやポイントに設問１を含めた現状を課題として記述した上で、対策についての自分の意見を字数制限内に記載できていた。しかし、その記述量のバランスは個人差が大きく、図表４～６を個別に分析せず大枠でまとめたものや、対策が２/３以上を占めた答案、反対に対策について殆ど記載できてない答案もあった。500 字の字数制限内で、どのように論理を展開して記述するのか文章構成力が重要である。

＜その他＞

誤字（自故→事故、入溶→入浴、急しい→忙しい、身守る→見守る、婦夫→夫婦、除々に→徐々になど）や脱字、漢字の送り仮名間違い、主語述語のねじれ、ら抜き言葉の使用、などが見られた。また、口語的な接続詞（例：「そして」など）や、不適切な副詞（例：「半数ほどなのに『極端に多い』と記述する」など）もあった。さらに、段落の最初の１マスを開けていない、数字を１マスに 3 つ以上詰め込んでいる、マス目から語句を挿入している答案など、原稿用紙の基本的な記述ルールを守れていないものも散見された。また、根拠となる図表番号の明記がないものや、本問題で用いられている「図表」と記載せず、「図」「資料」などと表記したものも複数あった。その他、設問や図表では「子ども」と表記されているものを「子供」と表記しているケースが散見された。また、設問２では、段落を分けずに、対策を記述している解答も多く見られた。説得力のある文章を記載するための基本的な事項は、今一度確認し、小論文として適切な記載を心掛けてほしい。